【所　感】

長崎市議会議員　武次　良治

福州市友好都市提携３５周年記念訪問団参加報告書

◇１１月９日(月)　上海経由で空路、福州市到着

初めて訪れた中国は、あいにくの曇り空で霞がかった空からはPM２．５の状況は分からなかった。約３時間待ちの便で福州市へ。予定時刻より大幅に遅れての到着となったが、福州市外事華務弁公室の皆さんから暖かい出迎えを受けた。職員の皆さんは親しみやすく、友好都市として親密な交流が続けられてきたことを実感した初日となった。

◇１１月１０日（火）　水産交流団と水道交流団の二班に分かれて現地視察

水産交流団の一員として、ワカメ養殖地と海洋漁業技術センターの視察に参加した。

当地で養殖されているワカメは北海道で採れる昆布のように巨大なもので、日本のワカメとは全く異質のもののように感じた。種類も１号から３号まで３種類の養殖を行っており、海水温度に応じて安定した生産体制が採られていた。養殖から加工、販売までを当所で行っており、１３億国民の胃袋を支えていくという自負が感じられた。

ただ、視察地に向かう途中で見えた沿岸の濁りが気になっていたので、養殖現場の状況を見ることができなかったのは残念であった。

続いての海洋漁業技術センターでは、長崎市で技術研修を積んだ職員数名も同席しての意見交換会であったが、同所の中核となって漁業技術の発展に尽くしており、交流の成果が上がっていることを窺い知ることができた。同所では、日本の厳しい検査をクリアするため中国一の厳格な検査を行っており、そのために世界最高水準の検査機器を取り揃えていることを自慢していた。ちなみに、その機器の内の二つは日本製であった。

◇１１月１１日（水）市内視察

福清市江陰港区は２００８年に開港したコンテナふ頭。桁違いの施設規模は圧巻であったが、巨大なクレーンのほとんどが稼働しておらず、警察から監視されながらの視察は不思議な空間であった。福州自由貿易試験区は本年４月に開設したばかりの行政サービスセンターで、受付ホールは活況を呈していた。

当夜は福州市副市長との会見に続き、水産交流協議書の署名が行われ、更なる友好と技術交流を深めることを確認した。

◇１１月１２日（木）　上海に移動

〇長崎県上海事務所訪問と長崎魚市アンテナショップの視察

上海大菱食品有限公司で長崎鮮魚の中国での販売状況について説明を受けた。本格的に輸出を始めた２００６年に比して２０１４年には、輸出量で７．２倍、金額で１１．６倍に増えており、取引は２６都市、店舗数は６００余りとなっているとのことである。

今では長崎鮮魚はブランドの頂点に立っているとの説明であった。日本食を食べた旅行者の鮮魚への欲求の高まりが背景にあるとのことであり、その意味でも、もっと多くの観光客の誘致の必要性を感じた。一方、旅行者の増加で空輸できるキャパシティが少なくなっており、飛行機の大型化に向けての協力を要請された。市として、どのような取り組みができるのか検討すべきであると感じた。

鮮魚では、アジとサバが人気であり、品質と安定供給が強みであり、当面、ライバル事業者はいないと自信を込めての話であった。人気魚種の更なるブランド向上のための取り組みに期待したいところである。

――　結び　――

このほかにも三坊七巷や南京路などの中国の街並み、そして夜景の視察もあり、充実した中国訪問となった。駆け足での行程であり、一般市民の生活実態がわかるような視察をできなかったことが心残りであった。